

特 100

219

藤井武先生述

産痛まさに終らんとする日本

産痛の記録としての歴史——奈良平安の佛教文明——  
江戸の儒教文明——東京の無宗教無道德文明——時は  
満てり



始



### 産痛まさに終らんとする日本

使徒ヨハネはパトモスの島にありて靈感を受け、多くの幻影を見た。その中にひとりの婦人があつた。身には衣のごとく口をまとひ、足の下には月を踏み、頭に十二の星の冠冕を戴いてゐた。彼女はまた孕つてゐた。そして産期も近づいたと覺ぼしく、産みの苦みのために聲を擧げて叫んでゐた。

それは勿論現實の婦人ではなかつた。「また天に大なる徴、見えたり」というてヨハネはその經驗を語り出てゐる。徴すなはち象徴である。産痛にさげぶ婦人によつて象徴せらるゝ或る者

をヨハネは見たのである。

然らば何か。彼女がやがて産むところの子によつて。ほゞそれを察知することが出来る。「女は男子を産めり。この子は鐵の杖をもてるろくの國人を治めん。かれは神の許に。その聖座のもとに擧げられたり」とある。誰と名ざらずとも、舊新約を通じて或るひとりの者を示すに用ゐられたる語句を綴り合せば殆ど疑を容るべき餘地がない。キリストである、神の子、メシア、人類の救主の出現である。

救主の出現のためになやましき産みの苦みをなしたものは誰か、精神的にキリストの母たるの役目を務めたもの、それは舊

約時代の凡ての聖徒ではないか。

聖徒らである。故に日を着。月を踏んで、榮光と勝利とを約束せられてゐる。舊約の聖徒らである故に十二の星の冠を被りて、ユダヤ十二族の選民たるを表示してゐる。ヨハネは舊約の聖徒らが産まんとしていたく苦むを見た。産まらるべきキリストは彼らの理想である。彼らはおのが理想を産出せんがために、長きなやみの時を過した。

詩人的使徒の見たるこの幻影を、ヘブル書記者は歴史家の筆を以て、現實に描寫してゐる。有名なるヘブル書第十一章がそれである。まことに「信仰によりてアブラハムは……その往く

ところを知らずして出て行き」たるより、他の者らが「乏しくなり、惱まされ、苦められ、荒野と山と洞と地の穴とにさまよつた」まで、前後二千年のあいだ、彼ら雲のごとき聖徒團は、ひとへに産まんがために大なるなやみを續けた。彼らは産まんがために生き、産まんがために死んだ。彼等にとつて人生は一個の産褥であつた、歴史は悼ましき産痛の記録にほかならなかつた。

併しながら斯のごときはひとり彼等のみの事であるか。たとひ自ら明かに意識せずとも、彼らと共に全ユダヤ人が、否、全人類がひとしく産みの苦みをくるしんだのではないか。或は今

なほそれを繼續してゐるのではないか。實に世界歴史そのものが、始より、失はれたる人類の自己探求の記録でなくして何であるか。古代歴史に於て人はたゞ國家の相ついで互に轉覆し合ふを見る、血なまぐさき戦争が都市を廢墟に歸せしめ國民を滅亡又は俘囚に陥らしむるを見る。而して其他に何をも認めない、これら古き世界の大きな動亂の下に、人は眞實の歴史を見とめない。眞實の歴史とは何か、人類が自己を捕捉し自己を了解せんとする努力である、眞個の人をうまんとする産みの苦痛である。恰も人以前の時代に於て巨大なる羊齒や饕餮の兩棲類や怪物的四足獸の下に、我らは根本的にたゞ一のもの、即ち人にまで

途を備へつゝある自然を認めるやうに、キリスト以前の時代に相ついで歴右の舞臺を占めたる大帝國の中に——アッシリア・バビロンの世界とその強き軍事的勢力の中に、メヂヤ・ペルシア王國とその力ある行政組織の中に、ギリシア民族とその比ひなき藝術的科學的天才の中に、ローマ帝國とその大なる政治的中央權力の中に、眞の歴史家は一のものゝを認識する即ち己がもろくゝの能力の十分なる發達のために、自己および世界の完全なる支配のために、努力する人類である、換言すれば、神に對する任意的降服を目的として（たとひ未だ明白に之をさとらずとも）自己の完き獲得のために勞苦する人そのものである」（テロー）

(7)

世界歴史の全體より見て、キリストの出現は深き意味に於ける理想の成就であつた。唯に日と月とを纏ひ十二星の冠「冕」をいたゞく舊約の聖徒らが、こゝに産みの苦痛を全うして、その待ち望みしメシアを與へられたのみでない、全人類も亦こゝにその理想の子、眞實の人を見出したのである。人そのものがこゝに完き自己を發見し之を獲得して、生命の理想境に到達したのである。先に自然より人へと飛躍したる宇宙は、こゝに人より完全なる人へと上進したのである。キリストに於て人類の追求する一切のものが完全に充たされる。彼を見出した時に、我等の世界は一まづその長き産痛を全うした。

しかし世界の歴史があると共に、また國家の歴史がある。人類の生活があると共に、また民族の生活がある。全體としての成功必ずしも直に各部分の成功ではない。人類が自己を發見するも或る民族は依然として摸索をつゞける。世界が理想を實現するも、或る國家はなほその産みの苦痛を終らない。斯の如くにして或は千年また二千年、自ら光明を攫むまで、おのが子をまうくるまで、地のこゝかしこに悼まじき叫びはだえず擧がる。而して我等の日本も亦その遺されし不幸なる民族の一でないとは誰が言ひ得るか。

我等は知る、我等に、世界に珍らしき歴史の存することを。

(9)

我らの祖先は民族として決して凡庸なるものではなかつた。理想追求の熱心に於て、自己發見の努力に於て、わが日本民族は世界いづれの民族に劣らうか。たとひ個人としては未だ甚だ偉大なる人格を見ないけれども、民族全體として我らの祖先のごとくに向上的精神の横溢するものは多くない。歴史はすべて人類の自己探求の記録であるとはいへ、二千五百年の日本歴史にまさりていぢらしくも純朴なるものがあらうか。成る程そこに偉大又は深刻と稱すべきほどのものは殆どない。併しながらそこにひとつの理想に對する切實にして變らざる憧憬があり、およそ善しと認むるものは何たるを問はず尊敬を以て迎へ入れん

と欲する謙遜にして寛容なる欲望があり、進歩のためには根ぶ  
 かり國民性とさへも闘うてやまざらんとする眞率にして忠實な  
 る努力ある事を何人も打消すに由ない。古き日本歴史は確かに  
 東洋西洋の何れにも例を見出しがたき獨一なる記録である。

日本の文明の代表的なるものは、奈良朝および平安朝時代、江  
 戸時代、ならびに明治大正時代である。その他は概ね創業または  
 過渡の時代に屬し、積極的文明の認むべきものがない。而して  
 奈良平安兩朝はほゞ之を同一文明の繼續と看做し得るに反し、  
 平安、江戸、および東京文明は何れもその性質を異にし各々著  
 るしき特徴をそなへてゐる。

まづこれを文明の基礎となるべき精神的勢力の方面より見ん  
 か、佛教の感化は平安に、儒教は江戸、に而して無宗教無道徳  
 は東京に於て明白に發現したのである。

求めてやまざる若き倭民族、而も固有の文明を有せず、宗教  
 といひ得る宗教を有せず、文字をすら有せざりし我等の祖先は  
 ひとへに眼を外に注いだ。かゝる處へ三韓を経て或は經ずして  
 洪水の如くに押し寄せ來りしものは、盛なる支那文明であつた  
 即ちその文藝である、その産業である、その制度である。而し  
 てまたそれらに伴うて印度に起りし宗教があつた。

佛教が我が國民性と甚だ縁遠きものであることは疑ふべくも

ない。素ともと樂天的にして心軽く現世的にして深刻味うすき日本民族に不似合なる宗教として佛教のごときがあらうか。之を受入るゝは國民の精神的生活を逆流せしむるに當る。加ふるに天皇崇拜思想てふ大暗礁がある。もし當時の國民が舉りて支那文字は採るべし、その織縫術は採るべし、佛教のみは之を謝絶せざるべからずと叫ぶこと、恰も明治の同胞の西洋文明に對するごとくであつたと假定するとも、何ぞ怪しまうか。

併しながら我等の祖先は我等の如くに愚昧ではなかつたのである。彼らは信仰に根ざさずしては文明の華咲かざることを見破して。彼等は國民生活の基礎とすべきものを發見し、雀躍し

て喜んだ。彼らは異常なる勇氣を以て進んで、新らしき外來の宗教を迎へた。而して磐石のごとくに堅く深く之を据ゑつけた。我らは顧みて、日本歴史の危機に際し、よく國民の精神を現世以上のものに繋ぎたる當時の先覺者の決斷を讚歎し感謝せざるを得ない。この賢明なる國民的決斷の指導者は誰であつたか。實に當時の攝政東宮聖德太子その人であつた。

礎石一たび定まりて、大伽藍は見事に築き上げられた。質實なる奈良朝、およびそれに續く優美なる平安朝文明これである。その思想、その藝術、その文學、一に佛教の感化にもとづく。まことに「真正の意義に於ける日本文明史は佛教の渡來を以て



開卷となすといふも不可ない」のである。(藤岡作太郎氏)

日本は斯の如くにして佛教を試みた。而してその結果に勿論多くの善きものがあつた。就中徒らに淺薄に流れんとする國民思想を兎に角人生の深所に觸れしめたことは、永久に没却すべからざる佛教の功蹟である。もし此宗教だになかりせば、日本民族の精神的な生活は恐らく蒸發しつくして消え去らなかつた事を誰が保證し得やうか。過去に於けるわが國の最も優れたる産物は多く佛教の感化によるといふも決して過言ではない。

併しながら佛教は遂に光明の日を我國に實現しなかつたのである。平安文明、燦として華のごとくに匂ふといへども、その

根底に一大缺陷あるを否むことが出来ない。一はものぐらき厭世思想である。二は義を慕ふことの缺乏である。當時の所産にして日本文學史上最大の傑作と稱せらるゝ源氏物語はよくその消息を語る。蜜の如き、しかし如何に濁りたる歡樂よ、またその基調をなすところの如何にしみじみたる寂しさよ。而して之ら二つのものこそやがて佛教自體の缺陷ではないか。今は論議をさけて事實にのみ訴へる。わが國上下の間にあまねく佛教の行はるゝこと既に千三百年、而して佛教は遂に我等をして溢るゝ生の歡喜と、その道徳的實力とを經驗せしめなかつたのである。無限の榮光を望みて喜び、患難をも喜びとする生涯、若く

は罪の重荷の取去られて鷺のごとく翼を張りつゝ高翔する經驗などが曾て我國の何處にあつたか。後年鎌倉時代に起りし新佛教といへども此點に於て何ら異なるところはなない。我等の祖先の實驗上、佛教は到底、生命の宗教でないことを證明したのである。義と愛とを以て充實し緊張し、而してなほ限りなくゆたかに生命の溢れゆくやうなる社會はこれを佛教の感化に期待すべくもない。

儒教は佛教よりも一步を先んじて我國に入つた。しかし當年の聰明なる先覺者が、道德よりも宗教の重きを見認らなかつたがために、儒教は長らく不遇の地位に立たせられた。先づ試み

られし佛教が、その現はし得べきあらゆる能力をつくして、遂に國民の理想的生命を産出するに足らざることを證明したる後に、やうやく儒教はおのが時を得たのである。近世江戸時代すなはちこれである。

佛教千年の經驗に光明を見出し得ざる國民が、轉じて儒教に向ひし熱心にも亦目ざましきものがあつた。藤原惺窩を始め林羅山、山崎闇齋、木下順庵等、知名の儒者はみな佛門より出て、この古くして新らしい道に走つたのである。爾來有爲の人材の輩出して、ひたすら國民が精神生活の指導に努力したること、恰も奈良朝以後の佛教に異ならない。江戸三百年の文明は

この基礎の上にうち建てられた。

併しながら斯の如くにして採用せらるゝに至りし徑路そのものが、既に儒教の失敗を豫言して餘りある。より高きもの先づ落ちて、やむなくより低きものが選ばれたのである。それは始めより失敗の名残に過ぎない。

果然江戸文明は大體に於て最も低級なる道義文明として終つた。そこに深刻なる人生觀もなければ美はしき情操もない。せゝこまじき實際的の標準を以て生ける人格を律せんとする力あるのみ。道德の有るは無きにまさるとはいへ、勤善懲惡主義の淺薄さに堪へ得るものは誰か。その最もよき典型を馬琴の小説

に於て見る。出て來り出て去る忠勇貞節の士なるもの實はいづれも囚はれたる、生命なき小人物に過ぎない。神を信ぜず永遠を思はず、人生の深さと靈魂の貴さとを知らずして、徒らに小き道義の繩を張り廻したる形式文明の空しさよ、禍ひよ。

奈良平安の宗教文明に敗れ、江戸の道德文明に敗れたる日本は、明治に至て遂に大膽にも最後の新らしき試みをこゝろみた。すなはち無宗教にのて無道德な文明である。

あゝ現代日本の國民生活に於けるこの收拾すべからざる破綻を誰か怪しまら。思想の混亂、道義の頽廢、情操の腐敗、みな餘りにも當然の收穫である。信仰を蔑み、道德を卑みて、善き

ものゝ生るべき筈がない。千五百年の日本文明は、遞下をつゞけてこゝに至る。人類が經驗し得べき國民生活の最も低劣なるものは最近まで之を東京に於て實見することが出来たのである。

或はまた文明の中心たる心的活動の方面より少しく之を觀察せんか、平安朝が疑もなく情趣をよるこびたるに對し、江戸時代は明かに意思を重んじた。而して現代に於ける理智の尊重はわが國歴史上かつて見ざりし現象である。もゝしきの大宮人は櫻かざして今日も暮した。江戸の兒らは義理のために人情を殺した。而して科學の名によつてしきりに信仰を嘲るものは今の

新人である。

宗教と、道德と、而して無宗教無道德である。感情と、意思と而して理智である。あゝ日本もまた努めたるかな。眞實の生命を攫まんがために、人らしき人を見出さんがために、自己を了解し獲得せんが爲に、凡そ外より受入れ得べきものは之を受入れた、凡そ内より發揮し得べきものは之を發揮した。優しき心情は深き佛教に應じ、堅き道念は正しき儒教に従ひ、聰き知慧は博き科學に答へて、探求また探求、修養また修養、實驗また實驗、佛教渡來以來千三百年、建國以來實に二千五百年。長しといへば長き時であつた。併しながら一たびその事業の性

質を思ふときは、之をも長きに過ぐると言ふことが出来ない。ゴッティの曰やうに「人の心は深き井である。その深さを測るに時を要する。プラトリー又はソフロクレスを讀みて我らは知る人の自覺がこの仕事の爲に如何ばかり力を盡したかを……墮落したる人類は己が道德的みじめさの状態に就てあらゆる屈辱の經驗を嘗めつくさねばならぬ、而してこの辛き學校に於て自己のうちにある凡ての無能力を認識すべく學ばねばならぬ。」

三千五百年の歴史は日本に取てまさしく此の學校であつた。此處に我等は我等の道德的みじめさを明白に自覺せんが爲にあらゆる屈辱の經驗を嘗めたのである。此處に我等は理想實現の

ための凡ての無能を自ら認識すべく學んだのである。それは辛き經驗であつた。しかし必要なる經驗であつた。

我等は試み得べき凡てのものを試みた。而して我等の試みたるところは皆失敗に終つた。罪のなやみを癒すこと淺しくて康からざるに康し康しといふものは佛教であつた。永遠を慕ふ心のまへに餘りにめてたきは儒教であつた。寂しきは信仰なく道徳なきの日、感情は我らを溺れしめ、意思は我らを化石せしめ、理性は我等を浮き漂はしめた。平安に眞理なく、江戸に生命なく、東京に道はない。我らはパンを求めて石を得た、我らは魚を求めて蛇を得た。

嗚呼、斯の如くにして、我等の努力は永遠の失敗に終るのである乎。日本は遂に光明の日を見ることを許されないのである乎。或は何處かになほ佛教以上の完全なる宗教が存在しない乎。何處かに儒教以上のいと高き道徳がありはしない乎。感情と意思と理性との上に全人格を限なく發展せしむべき永遠の靈的生命はない乎。我らの爲の道なり眞理たり生命たるものが、なほ何處かに存在しない乎。

産まんとして、日本は長き苦みをつゞけた。而して我らは知る、今や期は遂に満ちたのであることを。見よ、こゝにもまた日を着たる婦人が悼まじき陣痛の叫びを擧げてゐるではないか

期の満ちたる以上、彼女はとにかく産まねばならぬ。善かれ悪かれ、日本はその二千五百年の歴史を葬りて、將に最後の國民的紀元を劃せんとしつゝある。

いかに偉大なる、また光榮ある危機よ。知らず、此時に當りて、我等は果して産むべき者を産み得る乎。萬一にも「嬰孩すてに産門にいたりて、之を産みいだす力我らに無き」がごとくば(列王下二)「或はまた「我ら孕みまた苦みたれどその産めるところ風に似たる」がごとくば(列王下二)、何らの恨ぞ。」

あゝ我等をして産ましめよ、理想の日本を、我らの祖先の夢みたるよりもなほ光輝ある日の國を、世界に會て例なき「義の

住むところの新しき一國を。而して今に至る迄の長くもまた辛  
かりし産痛を空しからざらしめよ。聲きこえる。曰く「時は満  
てり、神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）

大正十三年一月十日印刷  
大正十三年一月十五日發行

著者 藤井武

發行者 桐生市桐生三三四 竹内寛次

桐生市安樂土町五一

印刷者 村上誠

終

